

進路指導室から 第267号

はじめに

久々の「進路指導室から」の発行になります。前号の発行から何かと慌ただしい日が続いていましたが、国立大学の前期試験の合否発表が終わり、やっと小休止といったところです。

さて、現在、新型コロナウイルス感染症の影響により全国の多くの学校で休校措置がとられています。本校も3月2日（月）から臨時休業に入っています。本来ならばこの時期は、学習や部活動等に取り組んでいる生徒の姿を校内で多く見かけるのですが、今年はそうした生徒の姿はありません。

新型コロナウイルス感染症はいまや世界各国に拡がり、今後の行方は不透明になっています。少しでも早い終息を願うばかりです。やはり学校という場所は、生徒がいなければ寂しいものです。

「生徒の「主体性」の評価」について

新年度をまじかに控え、2021年度入試に向けて準備を進めていく必要があります。2021年度入試においては、大学入試改革に関連して、次の2点について注目しています。

1つ目は、これまで行われてきた大学入試センター試験にかわる大学入学共通テストの導入です。このテストの導入により、これまで以上に、思考力・判断力・表現力を測る問題が出題されることが考えられます。

2つ目は、生徒の学習歴や特別活動の記録等に係る「主体性」の評価の在り方です。入学者選抜において、「主体性」の評価を取り入れることは容易ではないと考えていますが、この点について、萩生田文科相は2月21日（金）の会見で、新たに「大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議」を設置して、「主体性」の評価を検討し直すことを表明しています。今回の会見の内容には、すでに事業化されている「JAPAN e-Portfolio」（ジャパン eポートフォリオ）の見直しも含まれていますが、今後の動向には注目していきたいと思えます。

「科学道100冊プロジェクト」について

学研・進学情報4月号で「科学道100冊プロジェクト」について紹介されていました。このプロジェクトは、日本で唯一の自然科学の総合研究所である理化学研究所と、本の可能性を追求する編集工学研究所がコラボし、2017年に展開を開始しました。このプロジェクトは、「科学」と「本」という両研究所の強みを生かし、中学生・高校生を中心とした幅広い層に科学の魅力を多様な視点から継続的に伝えることを目的としています。

2019年のテーマは、「元素ハンター」「美しき数学」「科学する女性」です。ちなみに、理化学研究所 理事長 松本 紘 氏の選書10冊は、以下のとおりです。

- 新装版 道具と機械の本 デビッド・マコーレイ/著, 歌崎 秀史/翻訳 岩波書店
- システムの科学 ハーバート・A. サイモン (著), 稲葉 元吉 (翻訳), 吉原 英樹 (翻訳) パーソナルメディア
- 物理学とは何だろうか(上) 朝永 振一郎(著) 岩波新書
- 日本列島の誕生 平 朝彦 (著) 岩波新書
- いかにして問題をとくか G. ポリア (著), G. Polya (原著), 柿内 賢信 (翻訳) 丸善
- ご冗談でしょう、ファインマンさん〈上〉 リチャード P. ファインマン (著), Richard P. Feynman (原著), 大貫 昌子 (翻訳) 岩波書店
- ねじとねじ回し ヴィトルト リプチンスキ (著), Witold Rybczynski (著), 春日井 晶子 (翻訳) 早川書房
- シートン動物記 オオカミ王ロボアーネスト・T・シートン (著, イラスト), 今泉 吉晴 (翻訳) 童心社
- 完訳 ファーブル昆虫記 第1巻 上 ジャン=アンリ・ファーブル (著), 奥本 大三郎 (翻訳) 集英社
- ホーキング、宇宙を語る ビッグバンからブラックホールまで スティーヴン・W. ホーキング (著), Stephen W. Hawking (原著), 林 一 (翻訳) 早川書房

なお、このプロジェクトの詳細については、「科学道100冊次のサイト」(<https://kagakudo100.jp/>)に掲載されています。

「講話で伝えなかったこと」について

本校は3月19日（木）に終業式を迎えるはずでした。その際に、以下のような講話を予定していました。

少し前に、プロ野球の選手、そして、監督として活躍された野村克也さんが亡くなりました。

野村さんは、選手としては、戦後初の三冠王、歴代2位の657本塁打など輝かしい実績を残されています。また、監督としても、5回のリーグ優勝や3回の日本一などを成し遂げられています。

2月21日の毎日新聞の経済欄に、経営共創基盤CEO 富山和彦氏による野村さんの人柄に触れた記事が目にとまりました。その記事には、野村さんが恵まれない環境から、自分の頭で考え行動することで逆境をはね返されたことに対して、次のようにまとめられていました。

要は、世の中が当たり前としていること、先生や上司が正解として押し付けてくることを、簡単に与件として受け止めず、自分の頭で考え直してみろ、ということ。

野村さんも、先入観から自由に自分の頭で考え抜くことの重要性を強調されていた。確かに、世間には勉強家も物知りもそれなりにいるが、「自」らの頭に「由（よ）」って考え、行動する人は多くない。「考える」ことは外から見えないので、その成果を他人はその人の天才ゆえと見がちだが、それは違う。考えずに成果を出せる超天才なんてめったにいない。

野村さんにこんなエピソードがあります。テスト生から南海ホークスに入団した当初のことです。野村選手はなかなか芽が出ず、入団3年目に退団勧告を受けたことがあったそうです。入団3年目、弱点はカーブが打てないことでした。そのままだったら野球を辞めざるをえないことになってしまいます。そこで野村さんは、相手のピッチャーがカーブを投げる「くせ」を徹底的に調べることを思いつきます。これが当時としては画期的、つまりイノベーションでした。「くせ」がわかりにくい実力派投手に対しては、スタッフに当時としては貴重だった16ミリフィルムで撮影してもらい、映像を繰り返し分析してくせを探す。そこまでの投資も行いました。くせがわかると、カーブが来るタイミングがわかって、予測して打つことができるようになります。だから、打率が上がる。情報収集に対する努力で野村さんは一軍に定着し、そこから大活躍が始まるのです。野村さんと同時代のスターであった、巨人軍の王選手も長嶋選手も天才でありながら、「努力の人」として知られていました。野村選手も、当時のプロ野球選手の中では圧倒的に努力の人だったのですが、その努力の「使いどころ」が一人だけ違っていたわけです。

野村さんは、その後、南海ホークスを退団し、ロッテオリオンズ、西武ライオンズで、なおも3シーズン現役生活を続け45歳で選手としては引退します。引退後は、9年の長きにわたって野球解説者を務めます。選手時代の野村さんは陰気で、インタビューの受け答えも不愛想だったのですが、しかし解説者になってからは訥弁ながらも自分の言葉で野球を語ります。また「ノムラスコープ」などこれまでにない手法で野球解説をしました。従来の野球解説は「根性論」や「精神論」が中心でしたが、野村さんは自らがベンチで選手に説いていた作戦や戦術を、視聴者にわかりやすく話します。これは日本のプロ野球ファンを啓蒙します。野球には、理論に基づく「頭脳ゲーム」の一面があることをファンに知らしめたのでした。

このように、「自」らの頭で考えることを大切に、それまでのプロ野球を大きく変えた野村さんですが、最も称えられることは、野村さんを師と仰ぐ選手や指導者は数多いことだと言われています。野村さんにとって、監督として最後の試合となったのが、今から11年前の2009年に行われたとプロ野球パ・リーグのクライマックスシリーズ第2ステージの第4戦でした。野村さんが監督を務められていた東北楽天ゴールデンイーグルスは、この試合の敗戦により、日本シリーズへの進出を逃してしまいます。試合が終わり、自然発生的に野村さんのまわり人が集まり、胴上げが始まりました。その中には、東北楽天イーグルスの関係者はもちろんですが、対戦相手の日本ハムファイターズの関係者、そして、野村さんの55年間に及ぶ選手、監督生活の中で指導し、育て上げた方々が含まれていました。

また、野村さんが亡くなった後、非常に多くのプロ野球人が野村さんに育てられたことを感謝するコメントを出しています。「財を遺すは下、事業を遺すは中、人を遺すは上なり」という言葉があります。この言葉は、野村さんが講演の最後の決め台詞として使っていました。世の中は、財や事業を派手に成す人に注目し、持ち上げます。しかし、大切なことは社会に有意な人材を遺していくことが大切ということです。

先ほど、板倉校長先生から講話がありました。板倉校長先生にとっては最後の講話となるはずですが。私も基町高校での勤務が長く、そのうち5年間は進路指導部長として板倉校長先生に仕えてきました。ときには、反発することもありましたが、大きな役割を任せいただき本当に感謝しています。

ところで、板倉校長先生にこれだけは勝てないと思っていることが一つあります。それは、皆さんの一人ひとりに対する愛情です。進路指導でいえば、皆さん一人ひとりに皆さんが希望する進路を実現してもらいたいという願いです。この後、今年の3月1日に卒業を迎えた71回生の5人の卒業生に登壇してもらい、「卒業生進路講演会」を行います。きっと、板倉校長先生は、登壇してくれる卒業生の成長に対して、頼もしさとともに誇りをもたれることでしょう。

「卒業生進路講演会」を一番楽しみのしていたのは、板倉校長先生だったと思います。

終わりに（3年生へ）

皆さんは、「卒業生を送る会」を楽しみにしていたかと思います。また、式後、クラブ等の後輩たちと思い出を語りたかったことかと思っています。皆さんが楽しみにしていたことが叶わず、本当に残念です。この学年は、土曜日や日曜日に学校で学習する生徒が多かったように思います。皆さんのこれからのご活躍をお祈りしています。

瀬を早み岩にせかるる滝川の われても末（すゑ）に逢はむとぞ思ふ（崇徳院（77番）『詞花集』恋・228）

また、いつか。お元気で。

（文責:進路指導部 池本 邦彦）